for aduls
R18
only

UNIZO UNIKURA

ZERONOTUKAIMA

LOVE POTION PINK

ラブポーションピンク



今日は、うに蔵です。今回はゼロ魔本です。
アニメでさくっとルイズたんの可愛さにやられてしまいました、ツンデレって本当に最高です！
アニメから入ったので、一応原作も読んでおこうと小説の方も買ったりしたのですが、どうも最近活字になれていないせいかまだ読破出来ていませんです…。昔は良く読んでいたんですけどね、ラノベ。
そういえばもっぱら富士見派で他社のを買ったの初めてかも。

今回は初のオールカラー本です！
夏は本文カラーやったんですが、方向性を掴めず撃沈。今回は大人しくペインター塗りに戻しました、思えばあの夏は何をフォトショに必死になっていたんだろう…。リベンジのごとく挑戦したのですが、いやもう、死にかけました。覚悟はしていたけど。
とりあえず見れる最低ラインは死守出来たと思うのですが、反省すべき点がてんこ盛りです。
やっぱり塗りが単調すぎるかなーとか、思っちゃったりするわけですよ。ノーマル塗りばっかりで見ていて疲れちゃうみたいな。背景ないし（しくしく）。
もうちょっとエフェクトとか、カラーのバリエとか増やしたいですね。あとは計画性とだらけない精神力を養いたいです（笑）

スペースが余ってるんでコメントでも

表紙　媚薬を持ってるルイズたんです、ツンデレさを余す事無く表現してみた。つもり！
2P　ルイズたんカラー習作、冬のイベントカットにも使いました。これくらいロリの方が受けがいいのかなぁ難しいです。
3P 4P！キュルケさんは巨乳なので大変描きやすいです。キュルケもっと描いておけばよかったかなぁ。
4P　サイトを誘っちゃうルイズたん。
5P　シエスタさんは好きなんだけど、特徴が掴みにくくて描きにくいです…アンリエッタと特徴似てるから描き分けが難しい…。
6-7P　漫画もどき佳境、ここに限らず細かい事は気にしないで下さい…。
8P　モンモンの巻き毛は描くのが楽しかったんですが、ギーシュ…こいつは二枚目なのか三枚目なのか原作見てもアニメ見ても未だに判断が付かなくて…とりあえず二枚目にしたんですが…。
9P　鎧描くのが大変でした。
10-11P　差分を描いてみたかったので…て、手抜きなんかじゃないんだからねっ勘違いしないで！
12P　竜を描くのも鎧と同じく久々で楽しかったです、タバサは系統的に描くのが苦手な部類かなとか思っていたんですが、描いてみたら案外苦もなく描けた。
このPは比較的気に入ってます。
13P　ワルドとにゃんにゃん。
14P　メイドさーん！細かい所は都合良く改編。
裏表紙　ミニキャラです、ルイズの顔がデカくなってしまいました…。

それでは今回はこの辺で！

次回の本は暖かくなった頃に出てる？かな？

うにくら




「遅かったじゃない…」
サイトは部屋に戻った瞬間、その空気がいつものものとチガウという事を感じた。
声のした方へ視線をやると、ベットの上で足を組み、腕を両肘の上にすえた鳶色の瞳の少女の視線と交わった。
ご主人様は相当ご機嫌ななめのご様子である。
「久しぶりにちゃんとした風呂に入ったから長風呂しちゃってさ！」
「そりゃ気持ち良かったでしょうね」
ルイズの台詞が刺々しい…
「まさかシエスタと風呂に入ってる所を見られたのか…？いやまさか…」
様々な思いを巡らせ硬直しているサイトに、唐突にルイズが飛びかかってきた。
「サイトの馬鹿、バカ、ばか！どうして私を差し置いてあんなことしちゃうのよ！」
ーやはり見られていた、シエスタとの外風呂での情事を…ー瞬間、サイトは死を覚悟した、ひと思いに死ねれば幸せな方だろうか…この御主人様は使い魔に容赦ない。
「私と同じ事やりなさい！」
「………………」
「………はっ？」
何の冗談かと、サイトは理解するのにしばしの時間を要した。
そうこうしているうちにルイズはシャツの前を開けさせ、形の良い胸を露にする。
そしてサイトの腕を掴み、自分の方へ寄せ…
「へっ？」
「わ、私の胸だって柔らかくて温かくて気持ちいいんだからっ！」
ルイズは顔を真っ赤にさせてそう言った。
そもそもルイズが何故こんなに乱れてしまっているかと言うと、サイトとシエスタの情事を見て頭に血がのぼりなんだか喉が渇いたなと思っている所に、偶然中庭で月を見ながら茶会をしていたモンモランシーとギーシュに出くわした。
そしてそこで彼等が飲んでいた飲み物を横取りして飲んだのが原因だ。
ルイズが飲んだソレには媚薬が入っておりーこの有り様という訳である。
イチゴの様に顔をほてらせたルイズは尚も続けてこう言った。
「サイト！ご主人様にご奉仕しなさい！」
サイトはうなだれた、元はと言えば先ほどの出来事が原因だ…。

サイトさん国のお風呂ですか？
素敵ですね！私も入りたいなぁ

えっ、ちょ
シエスタまずいよ！
もし誰か来たら…

シエスタも入る？

ふふっ大丈夫ですよ
それよりサイトさんって
意外と恥ずかしがり屋さん
なんですね

なんて…冗談半分のつもりだったのに
シエスタは恥じらいも無く。給仕用の
メイド服をその場で脱いだ…。

でも、さっきから
私の胸ばっかり見てませんか？
もし触りたいんでしたら
触って頂いても構いませんよ
村娘の貧相な体などお気に召すか
どうかは分かりませんが…

そんな…シエスタの胸
おっきくて柔らかくて
温かくて最高だよ…

こっちの方も柔らかくて温かくて
最高ですよ♥サイトさん

そしてシエスタのお言葉に甘えて
五右衛門風呂の中でしっぽり
致してしまった…。

ちょっ…イキナリ入れるつもりっ？
えっ…あ ハイ…
いいこと？気持ち良くしてくんなきゃ
パカン
もうっ ホント駄目ね！お話しにならないわ！
ふわっ！
こういうのは順序が大切なのっ！乙女心を分かってないんだから！
まずは私がサイトを気持ち良くしてあげるのっ 御主人様が犬にご奉仕なんて普通は無い事なんだからねっ 感謝しなさい！



許さないんだからっ！
あ…あと痛くしたらご飯
抜きなんだからねっ！
ハアッ
ドキ
ドキ
トロ…
あっ…
サイトっ
ズプッ
パン
パン
ズプッ
チュプッ
もっと！
もっと奥まで突き上げてっ
そんなんじゃおまんこ
気持ち良くないのぉ！
ズプッ
サイトのちんぽが中で
大きくなってミルク
いっぱい入ってくるよぉ！
ビクッ
ビクッ
中がきゅうってするの！
やればできるじゃない！
できるじゃないっ！


「ボクの気を惹こうと媚薬を飲ませようとするなんて…そんな事を
しなくとも僕は君しか見えないというのに…」
相変わらずの調子で、歯の浮くような台詞を耳元で囁いた。
よくもまぁ、ぽんぽんとこんな言葉が口から出るものだ。いつも
の事ながらモンモランシーは呆れて溜息を一つ、ついた。
どうせこんな台詞、他の女にもいっているに決まっているのだ。
「ごめんね、君がそんなに僕にジェラシーを感じてくれている
なんて気付かなかった」
少し嬉しそうな、調子のいい声色が癇に障る。
「ちょ…勘違いしないで！別にそんなんじゃ…！」
ギーシュはモンモランシーを後ろからそっと抱きしめる。
「今晩は僕を独り占めして構わないよ、僕も君をそうするから」
蚕の生糸で織られたタイツは一番のお気に入りだったのに、
今は見るも無惨な姿。後でギーシュに新しいものを買わせよう、
モンモランシーは心に誓った。
「急にしおらしくなったね」
ギーシュは指で彼女の秘所を蹂躙しながら、首筋に唇をはわせた。
「あっ、嫌…そんなに指を動かさないでギーシュっ」
モンモランシーの言葉を聞き入れるそぶりも見せず、彼女の胸の
膨らみにもう片方の手の指を這わせながら、ギーシュは尚も彼女の
温もりを楽しむのであった。




サイト！昨日は全然気持ち良く無かったわよ！
ガ
御主人様一人満足させられないなんてアンタは犬以下よ！悔しかったら今日もご奉仕する事！いいわね！
バッ


きゃっ！もう出しちゃったの？
サイト…早漏過ぎるわ…御主人様が
良くなる前に出しちゃうなんて
最低よ！
ビク
ビク
ギュッ
今日は特別に私が調教してあげる！
しっかり覚えるのよ！
覚えないと許さないんだからっ！
パチュ
パチュ
パタタッ…


パサッ
突然シルフィードがタバサの服の裾を引っ張ってくる。
「服、欲しいの？」
タバサは首を傾げて問いかけるが、それにふるふると
首を振って風竜は答えた。
エメラルドの瞳は何処までも澄んでいて、まるで冬の
海の様だった。シルフィードは尚も必要に服を引っ張る
もしや、何かしら体の異常を知らせてくれているのでは
ないか…使い魔である彼等は主人と運命共同体、何かし
らた機を感じれはいち早く察知してくれる頼もしい存在
。タバサは静かに服の裾をそこつ辺りまでたくし上げた。
タバサが服を捲るなり、シルフィードはタバサの胸の先
をチロチロと舐めはじめた。
「あっ…、ダ、ダメ…」
反射的に身をよじるも、体の大きい風竜に辺を包囲され
てしまっては逃げ様が無い。
それに…タバサの思いとは裏腹に、体は確実に熱を含み
はじめる。あっという間に胸のつぼみは熟した果実の様
に膨れ上がり、敏感になる。
ーやはり体がおかしい…熱にうなされたような、朦朧と
した感覚の中タバサはそう思った。
下腹部が妙に疼くし、心が切ない…。
タバサは自分を慰める様に自分で自分を犯した。





LOVE POTION PINK
発行　うに蔵UNIZO /うに蔵UNIKURA
発行日　20061231

印刷　関西美術印刷

MAIL lovekan@neptune.livedoor.com
BLOG http://yaplog.jp/unizou/



LOVE POTION PINK






ラブポーションピンク

UNIZO UNIKURA ZERONOTUKAIMA FAN BOOK